C-6

大阪泉州方言における「ら」の複数性

大島 一（国立国語研究所）
h-oshima@ninjal.ac.jp

0．はじめに

日本語の複数をあらわす「ら」は（例，「こども-ら」など），共通語では一般にヒト名詞にしかつかないが（擬人化用法は除く）（加藤，2006），非ヒト名詞にもつく方言がある。そのうちの一つが関西方言である。本発表は関西方言の中でも，大阪泉州方言に注目し，その「ら」の意味用法を分析することで，先行研究で主張されている関西方言の「ら」の用法に新たな知見を与えることを目的とする。

1．先行研究

1.1．上林（2017）：関西方言

関西方言の「ら」の用法は上林（2017）で詳しく述べられている。そこでは，「ら」は，共通語と異なり， 非ヒト名詞のみならず（1b），様々な無生物名詞につき（1c），**複数をあらわす**ことが報告されている。

(1) a. 僕ラ，あんたラ，あの人ラ，太郎ラ，子どもラ
b. 猫ラ，うさぎラ，羽虫ラ
c. 教科書ラ，メモ帳ラ，靴下ラ，パトカーラ…

（上林，2017，p.65 より引用）

また，先行研究でも指摘されているとおり，関西方言における「ら」は，一方で複数だけでなく，「～など」「～とか」「～なんか」といった「例示」の意味としても使われる。

(2) 駅前に新しい雑貨屋できたらしいで。今度の日曜ラ覗いてみよか。
(3) どこで集まる？駅前の喫茶店ラどう？
(4) 旅行，あとひとりぐらい誘おうか。太郎ラどうやろ？

（上林，2017:66）

「例示」について，先行研究では，「いずれも話し手の中でいくつかの候補があり，それらの候補の一例として下線部の語が採用され，「ラ」がその例示マーカーとなっていることを示している」と説明されている。例えば，（2）では話し手の都合のつく日曜を候補とした上で聞き手に確認している様子である。他の例も，それぞれ下線部の要素が話し手の意図するもののうちの候補として「～ら」を代表的に取り上げて述べていることがわかる。

先行研究では「例示」の他に「マイナス感情の提示」として，「軽卑」および「敬遠」といった意味もあると紹介されている。

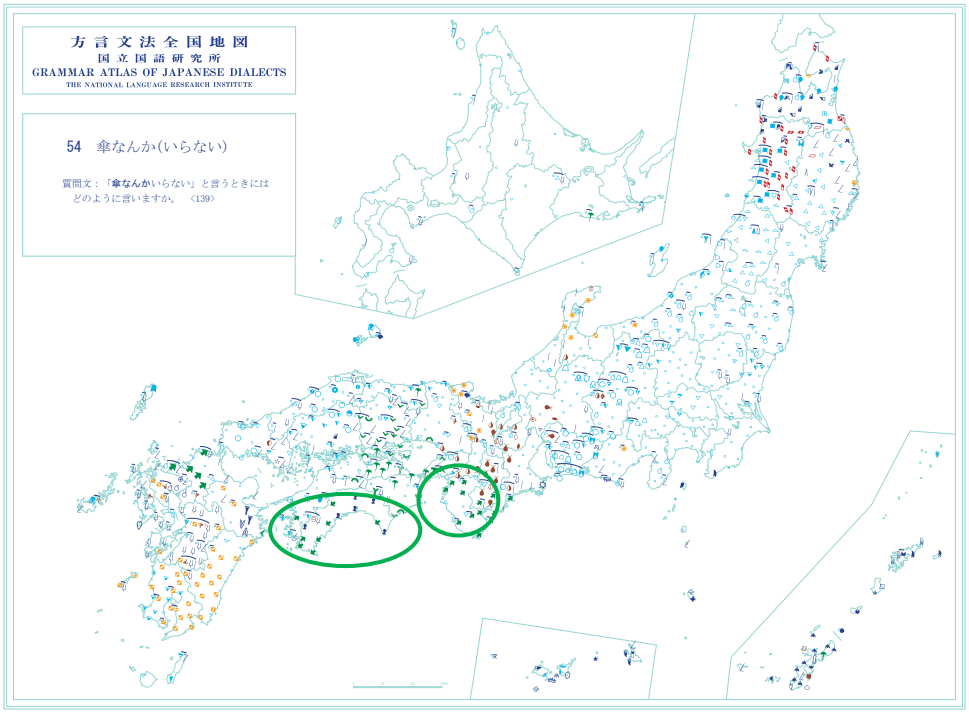
(5) そんなゲームラしてる暇あったら，宿題しなさい。【軽卑】
(6) こけて骨折して以来，自転車ラよう乗らんわ。【敬遠】

（上林，2017:68-69）

興味深いことに，(5) における「ゲーム」は複数である解釈の余地も残していることである。もちろん，「軽卑」の意味での解釈とされるとすれば，単数であっても適格とのことである（上林，2017:69)。

1.2. 国立国語研究所編『方言文法全国地図（GAJ)』:「ら」の分布

上で取り上げた「例示」用法であるが，国立国語研究所の『方言文法全国地図（GAJ)』の第 1 集第 54 図「傘なんかいらない」[1]の調査結果を見ると，高知県と和歌山県に「ら(ー)」が分布している（緑色の矢印「↗（ラ)」「↙（ラー)」)。「なんか」に対応する例であるので，「例示」の意味として使われる「ら」であることは明らかである。



関西における無生物名詞への「ら」の付加も，こうした近隣地域での用法が広まった結果かもしれない。以下では，参照例として，高知および和歌山における「ら」を見ていくことにする。

1.3. 上野（2001)：高知方言

高知方言における「ら」については，上野（2001）に詳しく述べられている。それによると，「ラ（ー)」はヒト名詞だけではなく，非ヒト名詞や様々な無生物名詞に付くことが報告されている。なお，上野（2001）では「ラ（ー)」の持つ意味が具体的にどのようなものであるかは明記せず，「＊」としている。理由は，「ラ（ー）は強調する意味合いが強く，「など」「なんか」とは異なるという教示を得たことによる」とある。以下はヒト名詞につく例である（抜粋)。

[1] http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-map-legend/vol1/GAJ1-54.pdf

(7) オバラーガ イヨッタンデス ヨ。おば＊が言ってたんですよ。
(8) トーキョノ ヒトラモ オルロー？ 東京の人＊もいるだろう？
(9) アタラシー コーラーガ ハイッテ。新しい子（＝部員）＊が入って。
(10) ケド マワリノ トモダチラーガ イキャーセン カイ？ けれど，周りの友達＊が（学習塾へ）行きはしないの？

（上野，2001:82）

これらヒト名詞につく例に関して，上野（2001）は，「（友達・家族のような）集合名詞に接続する場合は，ラ（ー）の本来的な複数表示機能は弱化，ないしは退化しているとみられる」と説明している。すなわち，これらのヒト名詞＋ラ（ー）の意味は複数の意味要素が前提として考えられているが，それ以外の意味もあると思われる。

次に非ヒト名詞および無生物名詞（上野（2001）では「その他」の分類）に「ラ（ー）」が接続する例を見てみよう（抜粋）。

(11) デパートデ オサカナラー カエレン ネー。デパートでお魚＊は買えないねえ。
(12) ゴハンラ ゼンゼン タベン。（最近の猫は贅沢で）ご飯＊を全然食べない。
(13) ツクエラーワ ウエニ アゲル カエ？ 机＊は上にあげるかい？
(14) ガクセキバンゴーラ キレイニ ナランジュー。学籍番号＊がきれいに並んでいる。

（上野，2001:82-83）

これらを見るかぎり，「ラ（ー）」には複数的意味も感じられれば，「例示」，またはなんらかの強調的意味合いがあるように感じられる。いずれにせよ，先行研究ではこうして「ラ（ー）」の意味を明示しなかった理由がここにあると考えられる。

1.4. 諸方言コーパス（COJADS）：和歌山方言（和歌山市内）

和歌山方言における「ら」の意味用法を調べるため，国立国語研究所による『諸方言コーパス（COJADS）』（平成 30 年度モニター公開版）[2]で「ら」を検索したところ，以下のものが見つかった（抜粋）。

《ヒト名詞》

(15) アー ワタシラ ヨー シタワ。《和歌山 71》
　ああ （1PL:私ら）［は］ よく したよ。
(16) アンタハンラ ウシノ ミズ チューノ オボエテマヘンカ。《和歌山 606》
　（2PL:あなたがた）［は］ 牛の 水 というの［を］ 覚えていませんか。
(17) アガラ モータ ホーヤ。《和歌山 545》
　（1SG：私）など［は］ 貰った 方だ。※1PL:私たち？
(18) ンー ハ ×8 チャンラ。《和歌山 735》
　んー （D:ハ） （R:×8）ちゃんなど。
(19) センセラ ジブン モ カネダッタデスカ。Aセンセラ。《和歌山 76》

[2] 基盤研究 A「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」（研究代表者：木部暢子）において作成されたもので，国立国語研究所編『全国方言データベース 日本ふるさとことば集成』の談話資料の音声データと文字資料を紐づけしたもの。なお，例文末尾の番号は和歌山方言データ内のサンプル ID。

先生たち［の］ 時分［は］ もう 鐘でしたか。（R:A）先生たち。

(20) ホデ ハハラデモ オト アノー オコラナンダケドモ コットバズカイワ〔19〕 ヤカマシカッタデス。《和歌山 702》
それで 母などでも（D:オト） （F:あの） 怒らなかったけれども ことばづかいは うるさかったです。

共通語訳に説明があるとおり，人称代名詞および普通名詞についた「ラ」は複数を表し，固有名についたものは「など」「なんか」といった例示用法であることがわかる。

《無生物名詞》

(21) ソーヤノー。ズット チサーイ ジブンテ ユータラ アノー オサララ ヨー シタケドノ。《和歌山 30》
そうだねえ。ずっと 小さい 時分って いったら （F:あの）「おさら[3]」など［を］ よく したけどね。

(22) ヒナハンゴト チューテ ハク〔9〕 セッケンノ ハコラ モッテ。《和歌山 309》
「雛さんごと」といって（D:ハク）石けんの 箱など［を］持って。

(23) オカシヤサンラモ アッタケドノー。《和歌山 322》
お菓子屋さんなんかも あったけどねえ。

(24) エプロンラテ ナ＊ コー ヤッテ ククッテノー。《和歌山 408》
エプロンなんて （D:ナ）＊ こう やって くくってねえ。

共通語訳を見るかぎり，無生物名詞における「ラ」はすべて例示用法である。当該コーパスの和歌山方言においては，無生物名詞につく「ラ」では，上林（2017）の関西方言にあるような複数表現は確認できなかった。

2．問題と疑問

以上，高知および和歌山方言における「ら」の用法は，ヒト名詞においては複数の意味を確認できるものの，非ヒト名詞および無生物名詞においては，複数というより強調（＝高知方言），もしくは例示のみ（＝和歌山方言）であることがわかった。

ここで，冒頭に紹介した関西方言の無生物名詞の「ら」が複数をあらわすということに対する疑問が生じることになる。関西方言の無生物名詞につく「ら」は，上で見た高知や和歌山方言とは別のものなのかどうかを明らかにするために，以下では，これら両地域の間に位置する大阪府南西部の泉州地域（旧和泉国）で話されている泉州方言について，その「ら」の意味用法を調査した。

3．調査データ

3.1．大阪泉州方言について

大阪の南西部における泉州方言（和泉方言とも）は，大阪の方言でありながら，南の和歌山方言からの影響も色濃く受け継ぐといった特徴を持っている。泉州方言は北部が泉北方言（堺市など），南部が岸和田市以南の泉南方言に分かれ，現在では泉北方言は大阪市内

[3] 「お手玉」のこと。

のことばの影響が強い（西尾，2018:120）。したがって，従来の泉州方言の特徴を保持しているのは泉南方言とも言える。なかでも，発表者が調査した岸和田市内畑町は市内でも伝統的な山手地区であるため，大阪市内の方言の影響が薄い地域であると考えられる。

この，岸和田市内畑町出身・在住の年配層 4 名（70 代男女と 50 代男女）と，若年層 2 名（20 代男女）に，「ら」の意味用法を調査した。調査は，ヒト名詞，非ヒト名詞（動物・昆虫など），無生物名詞，それぞれに「ら」が付くかを質問し，付けることができる場合，その意味を確認した。

3.2．年配世代における「ら」の意味用法

発表者が調査した 50 代と 70 代の 4 名の年配層話者による，「ら」の複数用法を調べた結果は以下の通りとなった。

(25) a. わたいラ，わがラ，あんたラ，子どもラ，先生ラ，生徒ラ，社長ラ，店員ラ
b. 犬ラ，猫ラ，うさぎラ
c. *ねずみラ，*鳥ラ，*牛ラ，*豚ラ，*さかなラ，*ハエラ，*セミラ
d. *教科書ラ，*メモ帳ラ，*靴下ラ，*パトカーラ

ヒト名詞および一部の動物には複数の意味で「ラ」が使えるが，それ以外の動物および無生物につく「ら」は，複数を表す意味用法ではまず使用することができない。そのかわり，例示用法であれば使用可能であるということがわかった（なお，ヒト名詞および一部の動物である（25a, b）は複数だけでなく，例示の意味でも使用される）。

(26) a. 教科書ラ はやく かたづけーや。
b. 靴下ラ はやく たたみや。
c. あこの 家に パトカーラ 来てらし。

無生物名詞であるこれらにつく「ら」はすべて例示用法であるので，例えば，（26a）であれば，机の上に教科書をはじめ，ノート，鉛筆，消しゴムなどがあるなか，そのうちの一つとして「教科書」を取り上げていることになる。

この結果は，1.1.で見た関西方言の先行研究である上林（2017）における無生物名詞に付く「ら」の複数用法と矛盾をきたすことになる。

3.3．若者世代における「ら」の意味用法

一方，岸和田市内畑町の 20 代男女に同様に調査したところ，上記の年配世代とは異なり，年配世代では複数の意味で使えなかった（25c, d）においても，複数で使えるという。

(27) a. 教科書ラ はやく かたづけーや。（※教科書のみ複数ある）
b. 靴下ラ はやく たたみや。（※靴下のみ複数ある）
c. あこの 家に パトカーラ 来てらし。（※パトカーのみ複数来ている）

すなわち，大阪岸和田地区においても，若者世代では，先行研究のとおり，無生物名詞に付く「ラ」は複数を意味する。この問題について，一般に，関西の若者世代が「ら」を無

生物にも比較的容易につけることができるということを考えると（発表者の周囲の関西出身の 30 代以下の人たちも，無生物名詞に「ら」をつけることで複数をあらわせるとのこと），世代間における違いとも言えるかもしれない。

4．議論と分析

泉州方言は和歌山方言の影響を強く受けているということを考えると，無生物名詞＋「ら」においても，3.2.における年配世代の用法が泉州方言本来のものであると考えられる。すなわち，複数の意味では使われず，例示用法のみということになる。

そうすると，問題は泉州方言における若者世代と，関西方言の無生物名詞＋「ら」の複数用法ということになる。本来，無生物名詞は同質性が高いため，あえて，単複の区別をする必要がなく，単数（＝無標）のままで複数を含意できるはずである。共通語で同質性が高い非ヒト名詞に「ら」がつけられないのはその理由からであると考えられる。

では，どうして，無生物名詞に付けなくてもよい「ら」を付ける必要があるのか。「ら」は，付く名詞によって，参照体として際立っている名詞であれば近似複数（Associative Plural），そうではなく同質性が高い名詞であれば累加複数（Additive Plural）という意味解釈が選択される。これに，大阪の近隣である和歌山（そして高知）における無生物名詞にも「ラ」が付けられるということを知った関西の若者世代がイノベーションとして採用したのではないだろうか。ただし，泉州方言の若者世代でも同様の用法が見られるわけであり，この用法が泉州方言の若者からのものなのか，それとも関西全域の若者世代からの発信なのかは不明である。

5．まとめにかえて

本発表では，大阪泉州方言における「ら」の複数をはじめとする意味用法について，特に，無生物名詞に付く「ら」の意味について，年配世代と若者世代に対して調査したところ，年配世代は，和歌山方言と同じく例示用法のみ，それに対し，若者世代では，先行研究の関西方言で見られたものと同じく，複数の意味で使われることがわかった。泉州方言の従来の意味用法は年配世代の結果である例示用法のみだろうが，若者世代はなんらかの影響を関西方言から受けたことにより複数用法でも使用できることになったのかもしれないが，この影響の流れに関する調査は今後の課題である。

謝辞：本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成（プロジェクトリーダー：木部暢子）」の助成を受けている。

参考文献

上林葵（2017）「関西方言における接尾辞「ラ」」『阪大社会言語学研究ノート』第 15 号，59-71.

加藤重広（2006）「日本語の複数形―2 つの複数と集合認知―」『国語国文研究』第 130 号，62(1)-48(15)，北海道大学国語国文学会.

西尾純二（2018）「泉州弁」，真田信治監修『関西弁事典』，ひつじ書房.

上野智子（2001）「高知県方言ラ（一）の暗示性と明示性」『日本語科学』9, 79-100, 国立国語研究所.